

天狗食日（月）考

王 鑫

「『天狗食日』掀旅游热潮 天文科技类旅游前景看好」（「天狗食日」現象が観光ブームを引き起こし、天文科学関係の観光は見通しが明るい）。これは2009年7月15日付の『西安晩報』に載った記事である。2009年に西安で皆既日食現象が起これ、多くの観光客を集めた。それ以前の2007年に広州で起こった日食現象についても、『南方日報』が「天狗食日」というタイトルで報道している。このように、現代の中国では、天狗が食日することは一般常識になっている。

天狗食日（月）の伝承は現在、中国全土に広く分布している。漢民族地方のみならず、少数民族地方にも流布している。

『紅河イ族辞典』によれば、イ族にも天狗食日（月）信仰がある。

昔々、太陽神と月神が、人間の起死回生の薬を盗んだ。人々は犬に月と太陽を追いかけさせた。しかし、月神と太陽神はすでに薬を飲んでいたので、犬が月と太陽を噛んでも噛んでも、月と太陽は死なない。それでもこの犬は諦めない。常に月と太陽を食う。それで、日食、月食現象が起こる。¹

ハニー族の天狗食月伝承は、次のとおりである。

ハニー族の神話によれば、ハニー族の祖先である三兄弟は不老不死の薬を有していた。月神はそれを知って、盗んだ。三兄弟は長い梯子をつくり、天に上って薬を取り戻そうとしたが、月神が梯子を倒し、三兄弟は地面に落ちてしまった。彼らが飼っていた犬だけが天に昇った。この犬は月を噛んで、薬を取り戻そうしている。それで、月食現象が起こる。²

天狗食日（月）の話は文学作品にもよく出てくる。中国で著名な文学者、郭沫若（1892-1978）が書いた『天狗』という詩は人口に膾炙している。冒頭に「我は天狗である。月をも食うし、太陽をも食う」という名句がある。このように、天狗食日（月）信仰は中国全土に流布している。しかし、歴史上の文献史料を調べてみる

¹ 紅河イ族辞典編纂委員会『紅河イ族辞典』雲南民族出版社、2002年、172頁。

² 錢仲聯『中国文学大辞典・下』上海辞書出版社、2000年、1873頁。

と、意外にそれに関する記録は少ないことが分かる。明の時代に入って、初めて天狗食月の話が見られるのである。

では、古代の中国ではどのように日食・月食現象を認識していたのであろうか。また、天狗と日食・月食現象とは一体どのように結びついたのであろうか。この問題に関する先行研究はかなり少なく、馬傑の『食月伝説探源』³と、鐘海柱の『民間伝説における「日月食」考趣』⁴が挙げられるのみである。両論文とも、月食と天狗、蟾蜍ひきがえるの関係について考察した上で、仏教の『百喻経』の影響があると指摘している。しかし、論文の結論で自ら指摘しているように、十分に論証できなかった点が多く残されている。

本稿は、先行研究を踏まえた上で、文献史料を頼りに、天狗と日食・月食の関係について解明を試みたい。

一 古代の中国における日食・月食現象に関する認識

まず、古代の中国でどのように日食・月食現象が認識されていたのかを明らかにしたい。儒・釈・道の三教、および文学作品を中心に考察する。

1. 儒家の認識

日食と月食に関する最も古い記録は儒教の経典に見られる。儒家の認識をまとめると、次の四点が挙げられる。

まず一つ目に、日食と月食は、君主と皇后の徳と関係があるとされていた。周代から漢代にかけて成立したとされる『礼記』には次のような記述がある。

是故男教不修，陽事不得，適見於天，日為之食；婦順不修，陰事不得，適見於天，月為之食。⁵

(天子が徳を十分に修めなければ、日食現象が現れる。皇后が婦人の道を十分に修めなければ、月食現象が起こる)

日食・月食現象が起こる時に、祭礼としては、次のような記述がある。

日蝕則天子素服而修六官之職，蕩天下之陽事；月蝕則後素服而修六宮之職，蕩天下之陰事。⁶

³ 詳細は、馬傑「食月伝説探源」『文芸生活』2011年4月、165-166頁を参照。

⁴ 詳細は、鐘海柱「民間伝説における「日月食」考」『趣大学教育』2013年4月、143-144頁を参照。

⁵ 呂友仁『礼記全訳・孝経全訳下』貴州人民出版社、2009年、870頁。

⁶ 同上。

（日食の時、天子は地味な服を着こなし、六官が職分を果たしたかどうかを監督する。月食の時、皇后は地味な服を着こなし、後宮の事務を監督する）

周の時代に誕生した天命思想によれば、君主の国を治める権力は天によって賦与されたという。しかし、君主は国を治める権力を有すると同時に、徳を常に修めなければならない。天の異常状態は常に君主の徳と関わっていた。日食と月食現象も天の異常状態の一つで、君主の徳と関係があるとされた。

二つ目として、日食と月食現象は、臣下が君主を犯す兆しとされていた。『春秋繁露』には、「大旱，陽滅陰也。……大水者，陰滅陽也。陰滅陽者，卑勝尊也，日蝕亦然。皆下犯上，以賤傷貴者，逆節也⁷」という記述がある。『春秋繁露』は、漢の董仲舒（紀元前 179-104）が著した。董仲舒は上下の秩序を重要視し、階級を秩序立てることを強調していた。下のものが上を犯すことは不義であるという。その時に、祭礼として、「故鳴鼓而攻之，朱絲而脅之，為其不義也」（鼓を打ち鳴らし、社を攻め立て、赤い糸を張り巡らして脅かす。陰陽の秩序を正し、ひたすら道理を実行して難儀を忌み避けることをしないのは義の最高）と、董仲舒は述べている⁸。後漢に入ると、天変地異の場合は太尉の職も免じるようになった。

三つ目に、日食と月食現象を科学的に解釈し、その発生は月と太陽が互いに蔽いあうために起こったとされる。

『論衡』では、王充（27-97 頃）が、次のように儒者の認識をまとめている。

日食は、月によって蔽われるためである。太陽が上、月が下にあり、太陽が月に遮られる形である。……月に遮られるのは、黒雲が日月を蔽って見えないのと同じだ。その一部分が合するのは、部分食である。合する場合、璧を重ねたようなものが皆虧食である。⁹

王充は、上記の解釈を不適當とした。日食は月のせいだという説に対し、彼はまず、日食が月のせいなら、月食は何のせいなのかという疑問を提出し、儒者たちが月食の原因を避けて言わないことを批判した（「知月蝕之，何諱不言月？……夫日之蝕、月蝕也。日蝕、謂月蝕之，月誰蝕之者？」、同上 768 頁）。彼は、日食と月食の原因については、「月を蝕するものはなく、月が自らを蝕するのである。日蝕も同じく、日が自らを蝕するのである」と考えていた。

最後に四つ目として、太陽には赤鳥、月には兎と蟾蜍が住んでいると考えられ、日食・月食現象の出現の兆しとして、竜の姿が現れるという記述が見られる。同じく『論衡』には、「儒者曰『日中有三足鳥，月中有兔、蟾蜍』」と記されている。こ

⁷ 日原利国『中国古典新書 春秋繁露』明德出版社、1977 年、166 頁。

⁸ 同上。

⁹ 山田勝美『新釈漢文大系 69 論衡 中』説日四版、明治書院、1979 年、768 頁。

の考えは、後に文学作品にも取り入れられ、日食・月食はこの三足鳥と蟾蜍からす ひきがえるによって引き起こされるという記述が多くみられるようになった。

唐の時代の占星術の本である『開元占経』には、日食・月食現象が現れる前に、雲上に竜の姿が現れると記されている。ここでは、「京房『日食占』曰『日之将蝕也、五龍先見於日傍』」と、京房の説を引用している。京房（前 77-37）は、漢の時代の易経の大家であり、災異や陰陽五行に精通する。彼は日食の兆しとして、五龍が日の周りに現れると記述した。龍の色、およびその出現方位の違いによって、異なった日食現象が起こるといふ。

このように、周の時代から、儒者は日食・月食現象に目を向け、儒教の天命思想や災異論によって解釈していたのである。

2. 釈家の認識

釈家の認識をまとめてみると、次の四点が挙げられる。

まず一つ目には、儒家と類似する認識があった。元の時代に百丈山大智寿聖禪寺の住職である徳輝が編纂した『勅修百丈清規』には、下記のように記されている。

日蝕 此日而食。……畏天之威。……由是謹發誠心。命僧諷誦經呪。用伸救護。……月蝕 月耀陰精而主夜。所頼照臨。天示咎徵于下民。……命僧諷誦經呪。用伸救護。所冀月華速賜還明。伏願妖蟆滅跡。清光現大地山河。顧兔長生。萬象納廣寒宮殿。¹⁰

日食・月食は天の懲罰である。多くの僧侶が誦経することによって、太陽や月を救護する。月食は儒家と同じく蟾蜍ひきがえるや兎と関係があると認識している。

また、唐の新羅の僧遁倫が著した『瑜伽論記』には多くの經典の説が集められているが、その中で、日食や月食に関しては、次のように記述されている。

言魚鼈等影現月輪者。餘經說言。有瞻部樹影現。三藏引本性經云。昔三獸共行仁義時。天帝釋欲試眞僞。兔拾薪燒火殺身供帝。帝怪至誠散安月輪。望世取措。¹¹

いくつかの經典では、魚や亀などの影が月に現れるという説が見られる。三藏は本性經を引用して、以下のように説明している。

¹⁰ 徳輝『勅修百丈清規 大正新修大藏經 No. 2025』大藏出版株式会社、1115 頁。

¹¹ 遁倫『瑜伽論記 大正新修大藏經 No. 1828』大藏出版株式会社、329 頁。

昔、獣が三匹いて、みな仁義の心を持っていた。天帝釈はみな仁義の程を検証しようとした。すると、兎が薪で火を燃やし、中に飛び込んで帝釈への仁義を表明した。帝釈はその忠実さに感動し、兎の死骸を月に埋葬した。

このように、儒家のいう「月に兎が住む」説は仏教經典にも記載され、仏教の要素を入れて再編成されたのである。

二つ目は、日食と月食現象は羅睺阿修羅によって引き起こされたという点である。この説は仏教經典において最も多く見られる。

北魏時代の瞿曇般若流支が訳した『正法念処經』には、「今者日蝕。……如是羅睺阿修羅王。障蔽日光¹²」、すなわち、日食に関して世の中には多くの説があるが、実はそれは、羅睺阿修羅王が日光を覆い隠したからだ、とある。

三つ目は、日食と月食は羅睺阿修羅が手で障ったのではなく、呑んだため起こったという点である。唐の天台宗の九祖の一人である湛然が著した『法華文句記』には、「怖日月時等者。大論十一云。羅睺欲噉月時。……汝莫吞月疾放去。爾時婆維見羅睺汗出放月¹³」（羅睺が月を呑みこもうとしたので、月はブッタに助けを求めた。ブッタが羅睺に月を呑まないようにと言うと、羅睺はたくさんの汗を流し、すぐに月を吐き出した）、と記されている。

最後に四つ目として、占星術では、日食と月食は羅睺と計都によって引き起こされたとされる。羅睺は食神であり、計都は食神の尾であるとされた。

唐の金俱吒が著した『七曜攘災決』にも、羅睺と計都に関する解釈がある。

羅睺遏羅師者。……逢日月則蝕。……計都遏囉師一名豹尾。一名蝕神尾。¹⁴
 （羅睺は黄幡、食神頭など多くの別名があり、いつも隠れている。太陽と月に逢うと食する。計都はまた豹尾、蝕神尾などと呼ばれ、羅睺と同じくいつも隠れて運行する）

以上をまとめると、釈家の認識では、儒家と同じく、月食は蟾蜍^{ひきがえる}によって引き起こされたという。またそれとは別に、羅睺阿修羅か、羅睺と計都という二つの悪星によって引き起こされたとも考えられていた。

3. 道家の認識

道家は、日食・月食現象に儒家ほど関心を持ってはいなかった。しかし、唐の時代に入ると、神仙道教が積極的に活動し、その中の一つである占驗派の隆盛もピークに達した。唐の李淳風（602-670）は代表者の一人である。彼の著作『乙巳占』

¹² 『正法念処經 大正新修大藏經 No. 0721』 卷第十九、大蔵出版株式会社、117 頁。

¹³ 湛然『法華文句記 大正新修大藏經 No. 1719』 大蔵出版株式会社、187 頁。

¹⁴ 金俱吒『七曜攘災決 大正新修大藏經 No. 1308』 卷上、大蔵出版株式会社、442 頁。

は、唐までの占星学の諸説を集め、真偽を見究めた上で再編成したものである。その中に日食占と月食占の二節があり、内容は儒家の説とほぼ同じである。

日食の原因について彼は、「蝕者、月来掩之也」（日蝕は、月によって蔽われるためである）と言っている。さらに、「臣下蔽君之象……大臣与君同道，逼迫其主，而掩其明」（臣下が君主を犯す兆しである）とし、日食の起こる時間や、それによって異変が起こる際の政治上の表象などについて説明している。また、漢の劉安（前179-122）が著した『淮南子』には、「麒麟斗而日月食，鯨魚死而彗星出¹⁵」（麒麟が戦うことは、日食と月食現象が出現する兆し）と記されている。

道家の認識は儒家とあまり変わらないが、日食と月食現象の出現する兆しは、龍ではなく、麒麟にあるとした。

4. 文学作品に見られる日食・月食現象に関する記録

文学作品では、日食は三足鳥、月食は蟾蜍^{ひきがえる}によって引き起こされたという記録が多い。

唐の卢仝（795頃-835）の『月蝕詩』では、「食月虾蟆精。径圆千里入汝腹¹⁶」と、月を食うのは蟾蜍^{ひきがえる}だとする。同じ記述は韓愈（768-824）の『月蝕詩效玉川子作』にも見られる。

念此日月者，为天之眼睛。……尝闻古老言，疑是虾蟆精。径圆千里纳女腹，何处养女百丑形。¹⁷

また、日食に関しては赤鳥が起こしたという儒家の考えは、詩作にも見られる。北宋の詩人である梅尧臣（1002-1060）が書いた『日蝕詩』には、「前时蝦蟆食爾妃，天下戢戢無有忠。……日月几度遭遮蒙。有人見之如不見，誰肯開口咨天公。老鳥居处已自穩，三足鼎峙何乖慵。……任看怪物瞽天眼，方且省事保爾躬。日月与物固无惡，応由此鳥招禍凶」とあり、月食は蟾蜍^{ひきがえる}、日食は三足の鳥が、月または太陽を呑んだからだとされている。

二 天狗と日食、月食現象との関係

1. 天狗食月の初出

以上から分かるように、古代では、天狗は日食・月食現象と全く関係付けられていなかった。では、天狗と日食・月食の結び付きはいつ現れたのであろうか。

¹⁵ 戸川芳郎『中国古典文学大系 淮南子・説苑』平凡社、1984年第11版、25頁。

¹⁶ 徐北文『唐詩觀止』済南出版社、1995年、237頁。

¹⁷ 宗传璧『韓愈詩選注』山東教育出版社、1986年、189頁。

調べた限り、天狗食月の初出は、明の劉炳（1331-99）が書いた『承承堂為洪善初題』という詩だと考えられる。中に、「天狗蝕月歲靖康，血戰於野龍玄黃」という一句がある。このように明の時代に入って、ようやく天狗は月食と結び付くようになった。

では、天狗食月という考えは一体どのように形成されたのであろうか。

2. 天狗と日食・月食現象との結び付き

天狗と日食・月食との関連性について、多くの先行研究では、『百句譬喩經』という仏教經典に言及している。それは5世紀末に中国に伝わり、南斉の求那毘地によって漢訳された經典で、100編のインドの寓話を収録する。そのうち、84編が「月蝕打狗喩」である。

昔阿修羅王。見日月明淨以手障之。無智常人狗無罪咎橫加於惡。凡夫亦爾。貪瞋愚癡橫苦其身。臥棘刺上五熱炙身。如彼月食狂橫打狗。¹⁸

月食が起こった時、無智な人間たちは阿修羅の仕業だと分からず、その責任は犬にあると考え、犬を叩いたりする習慣があった。これにより、インドの信仰では、月食現象は犬と関係があることが分かる。この考えが中国に伝わって、天狗と日食・月食が結び付くようになったと推測されている。

しかし、この仏教經典だけで、それまでの中国における天狗のイメージだけでなく、日食や月食に関する認識をも変えた那么简单に結論付けられるのであろうか。また、この經典では犬と言うだけで、天狗とは言わなかった。なぜ、中国では天狗となったのであろうか。

それを解明するために、まず、インドの天狗や日（月）食神話に関して調査する必要がある。インドでは、天狗はどのような存在であったのだろうか。

2.1 インドにおける天狗

インドの文献を調べてみると、天狗に関する記録は紀元前2000年頃から紀元前500年にかけて成立した『ヴェーダ』にまで遡ることができる。『ヴェーダ』はバラモン教の聖典であり、本集は四部ある。最も古いヴェーダは『リグヴェーダ』で、古い部分は紀元前2000年頃に書かれ、紀元前1～2世紀頃に現在の形に編纂された。その中に「天狗」の初出が見られる。

天狗の名前は、サラマーである。サラマーは、四つ目でまだら模様の犬である。『リグヴェーダ』において、インドラ神の使者としてパニ族のもとに派遣され、パニ族が奪った雌牛を取り戻した英雄である¹⁹。この天狗は後の『アタルヴァ・ヴェーダ』

¹⁸ 僧伽斯那撰・求那毘地訳『百喩經 大正新修大藏經 No. 0209』大蔵出版株式会社、556頁。

¹⁹ John G. R. Forlong. *Encyclopedia of Religions*, vol. 3. Cosimo Inc., 2013, p. 251.

において、子を二匹産む。この二匹の犬も、死神ヤマに仕えるサラマーと同じく、四つ目でまだら模様の天狗である。

『アタルヴァ・ヴェーダ』は紀元前 1500 年頃から書き始められ、紀元前 500 年頃に、ヴェーダ本集の一部として認められた。インドの土着民族であるアタルヴァン族とアーンギラサ族の知識を伝えたものである。外来民族のアーリア系人の思想とは異なる、インド土着民族の思想がまとめられている。1897 年にモーリス・ブルームフィールド（1855-1928）というイラン語・サンスクリット語学者によって英訳されているが、現在のところ中国語訳はなく、日本語訳も抄訳のみで、全訳はまだないようである。下の引用文は第六巻第 80 の賛歌で、英訳しかないので、英訳版の原文を引用することにした。

ヤマに仕える二匹の天狗はまた、太陽と月でもあるとされた。

VI, 80. An oblation to the sun, conceived as one of the two heavenly dogs, as a cure for paralysis.

1. Through the air he flies, looking down upon all beings: with the majesty of the heavenly dog, with that oblation would we pay homage to thee!
2. The three *kālakāṅga* that are fixed upon the sky like gods, all these I have called for help, to render this person exempt from injury.
3. In the waters is thy origin, upon the heavens thy home, in the middle of the sea, and upon the earth thy greatness. With the majesty of the heavenly dog, with that oblation would we pay homage to thee!²⁰

この賛歌は、悪魔 *kālakāṅga* というアスラと太陽をキーワードとしたものである。悪魔 *kālakāṅga* は天に昇りたがるため、煙突をつくり、それを利用して天に昇ろうとした。インドラ神も参加したが、糸を結んだレンガをこっそり煙突に入れ、天に昇ったとたん、その糸を引っ張って、皆を天から落とした。結局、皆が空中に浮かぶ蜘蛛となり、そのうち二人だけは天に飛んで行って、二匹の天狗となった。この天狗がヤマに使えるサラマーの子であると同時に、太陽と月でもある²¹。

『アタルヴァ・ヴェーダ』の第六巻第 80 の賛歌では、古代インドの祭礼の儀式も紹介している。

²⁰ *Hymns of the Atharva-Veda*, translated by Maurice Bloomfield. Atlantic Publishers & Distri, 1990, p. 13.

²¹ *Hymns of the Atharva-Veda*, translated by Maurice Bloomfield. Atlantic Publishers & Distri, 1990, p. 500.

ある人間が、体の動かない状態になった。それを治すには、二匹の天狗のうちの一匹、すなわち太陽を祭る儀式を行わなければならない。この儀式では、犬の足跡のついている土を採取して、体の動かない部分に速いスピードで塗る。また、犬の体からある虫を採取して燃やす。この虫は天に浮いている蜘蛛の象徴である。この儀式によって、人間の動けない状態を治すのである。

この賛歌から、次の三点が分かる。まず、古インドでは紀元前 1500 年頃から、太陽と月は天狗とされた。次に、天狗を祭るには、地上の犬をその象徴として使う。最後に、太陽と月は天狗であるが、その正体はアスラである。

2.2 インドにおける日食・月食認識

しかし、この賛歌では、天狗はまだ日食・月食現象と結び付いていなかった。インドにおいて、日食・月食現象はどのように考えられていたのであろうか。

紀元前4世紀頃から紀元後4世紀頃に成立したとされる『マハーバーラタ』は、『ラーマーヤナ』と並ぶインド二大叙事詩の一つである。ヒンドゥー経の聖典の一つであり、宗教的、哲学的、神話的な内容が盛り込まれている。四ヴェーダとは内容上、重なる部分もあるし、異なる部分もある。この『マハーバーラタ』に、日食・月食に関する記録が見られる。

『マハーバーラタ』の第一巻第 17 章に、乳海攪拌の話がある。

天神たちは天の甘露である不老不死の薬アマリタを獲得するために、悪魔のアスラたちに協力を乞い、乳海を一緒に攪拌してもらう。結果、甘露の入った白瓶を持ったダンヴァンタリが乳海から誕生した。その壮大な光景を見たアスラたちは大騒ぎする。その時、ヴィシュヌが幻術を用いて、魅力的な女の姿に変身し、アスラたちに近づく。愚かなアスラたちはアマリタを彼女に捧げてしまう。その後、騙されたと知ったアスラたちが武装して神々を攻撃すると、神々は、ヴィシュヌが取り戻したアマリタを分け合って飲む。そこで、ラーフというアスラが天神に姿を変え、神々に混じってアマリタを飲んだ。それを見ていた月と太陽が神々に告げると、ヴィシュヌはアマリタを飲んでいるラーフの頭を円盤で切りつけた。ところが、アマリタがラーフの喉元まで来ていたために、首だけは不死となった。ラーフの頭は月と太陽を憎み、今でもそれらを呑み込むという²²。これが、日食・月食の原因である。のちに、アスラと天神は敵同士となって、大戦争を行う。結局、敗れたアスラたちは海の底に逃げてしまった。

²² 毗耶婆著・金克木等译『摩訶婆羅多』中国社会科学出版社、2005年、59-62頁。沖田瑞穂「乳海攪拌神話とラグナロク」『明星大学研究紀要 [日本文化学部・言語文化学科]』第16号(2008年)。

この話は後に仏教經典に編み込まれ、ラーフは羅睺阿修羅となった。

西暦1世紀か2世紀頃のインドの有名な仏教詩人である聖勇菩薩が著した『菩薩本生鬘論』に、「投身飼虎縁起第一」の節がある。その中に、「於時大地六種震動。如風激水。涌沒不安。日無精明。如羅睺障²³」(太陽が光を失う状態になるのは、羅睺が障ったからだ)という記述が見られる。

また、110年頃にバラモンの家系に生まれた学僧で詩人でもある馬鳴菩薩が書いた『大莊嚴論經』にも、「況復欲加害 月入羅睺口……如羅睺羅吞食日月²⁴」と記述されている。

遅くとも西暦1世紀頃までには、ラーフが日月を呑む神話は仏教經典に入った。それが漢訳された際に、ラーフは羅睺あるいは羅睺羅となった。

以上のことから、インドにおいては、次のような図式が成立すると考えられる。

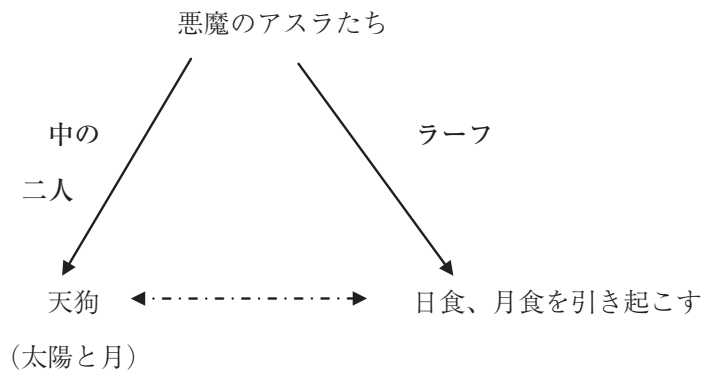


図1

このように、インドにおいて、天狗はもともとアスラで、太陽と月だった。その後、ラーフというアスラが甘露を呑んだことを太陽と月に告発され、太陽と月を食うものとなった。天狗とアスラの間には接点があった。『百喻經』のいう、月食の時に犬を叩くという習慣も、おそらくこのような神話から誕生したのであろう。

2.3 インドの日食・月食神話の中国への伝来、および天狗との関わり

インドの日食・月食神話は結局、二つのルートで中国に伝来した。一つは仏教經典の漢訳、もう一つはインドの占星術の伝来である。

²³ 聖勇造・紹徳慧詢訳『菩薩本生鬘論 大正新修大藏經 No. 0160』巻第一、大蔵出版株式会社、333頁。

²⁴ 馬鳴造・鳩摩羅什訳『大莊嚴論經 大正新修大藏經 No. 0201』巻第五、大蔵出版株式会社、330頁。

羅睺阿修羅王の神話、および天狗との関わり

上述した二つの仏教経典は後に漢訳され、中国に紹介された。

『大莊嚴論經』は、鳩摩羅什（344-413）によって漢訳された。鳩摩羅什は、十六国時代の亀兹国の西域僧である。二大訳聖の一人で、仏教普及に貢献した訳経僧であった。

『大莊嚴論經』は、『マハーバータラ』についても言及している。

我昔曾聞。有婆迦利人至中天竺。時天竺國王即用彼人爲聚落主。時聚落中多諸婆羅門有親近者。爲聚落主說羅摩延書。又婆羅他書說。²⁵

「羅摩延書」「婆羅他書」とは、『マハーバータラ』のことである。このように、羅睺が月日を呑む話は、4～5世紀頃に仏教経典とともに中国に伝わった。

求那跋陀羅（394-468）が訳した『雜阿含經』でも、「爾時羅睺羅阿修羅王・障月天子。時諸月天子悉皆恐怖²⁶」と、羅睺を障月天子と呼び、月の恐怖する相手であるとしている。

時代が下り、南北朝時代に入ると、瞿曇般若流支というバラモンの家系に生まれたインドの学僧が北魏516年に中国に来て、訳経事業に貢献した。彼が訳した『正法念處經』は、中国においても日本においても大きな影響をもたらした。『正法念處經』の説は、後の多くの経典によく引用されている。この経典の巻十八「畜生品」に、羅睺阿修羅が日食を起こす経緯が詳しく載っている。この箇所から、羅睺阿修羅が日食と月食を起こす原因、および羅睺阿修羅の特徴が分かる。

羅睺阿修羅が日食と月食を起こす原因は、二つある。まず、太陽や月の光がまぶしくて、羅睺阿修羅には美しい天女の姿が見えないからである。

欲觀園林。日百千光照其身上。……日障我目。不能得見諸天姸女。我當以手障日光輪。……時羅睺王。聞是語已。愛心即生欲見天女。從地而起。渴仰欲見。以手障月。（108頁）

次に、天上の世界を闇の状態にしたいからである。

我寶珠等。留此城内。爲我諸子作大光明。若無寶珠則無光明。天上亦爾。有日月故則有光明。若無日月則應闇冥。我今寧可覆蔽日月。令天黑闇。（108頁）

羅睺阿修羅の特徴としては、以下の四点が挙げられる。

²⁵ 馬鳴造・鳩摩羅什訳『大莊嚴論經 大正新修大藏經 No. 0201』巻第五、大蔵出版株式会社、281頁。

²⁶ 求那跋陀羅『雜阿含經 大正新修大藏經 No. 0099』大蔵出版株式会社、155頁。

1. 身量广大にして須弥山のようなものである。全身を宝石で着飾っており、眩しい光を出している。光明城に住む。(「身量廣大。如須彌山王。遍身珠寶。出大光明。大青珠寶出青色光。黃黑赤色亦復如是。以珠光明。心大憍慢。……其所住城。名曰光明」)
2. 雷のような声を発する。世の中の諸国の相師は「天獣が降りてきた」と言っている。(「震吼如雷。閻浮提中諸國相師。謂天獸下」)
3. 太陽や月を覆い隠す。日食、月食を引き起こす。(「掩蔽日月。令日月食。羅睺阿修²⁷」)
4. 師子兒であると同時に、龍でもある。(「時惡龍王力勢增長。震吼大雷。如大山崩。弗婆提人。以軟心故。多遭病苦。或耀電光。遍滿世界。如火熾燃。雲中龍現。……掩蔽日光。蓮華即合²⁸」)

羅睺阿修羅は、竜王でもあることが分かる。

また、羅睺阿修羅が起こした日食現象については様々な説がある。

或言當豐。或言當儉。或言凶禍。殃及王者。或言吉慶。

(ある人は、多分豊作の兆しだという。ある人は、多分凶作の兆しだという。また、ある人は、悪兆で君主に災いを及ぼす兆しだという。ある人は、吉兆だという)

月食現象に関してもそれぞれ違う説がある。

或言豐樂。安隱無他。或言災儉。五穀勇貴。或言王者崩亡。或言吉慶靈應嘉祥。或言兵刀起於境内。或言人民安樂無變。或言當須齋肅潔淨拜神求福。

(豊作や安楽の兆しだという人もいるし、災いや君主が崩御する兆しだという人もいる。さらに、庶民の安楽の兆しだという人もいるし、物忌みをして神を拝み、福を求めるべきだと主張する人もいる)

結論として、世の中の様々な説はこういう因縁を知らないために流れているのであり、それは実は羅睺阿修羅の仕業であるとされた。

また、『正法念処経』によって、初めて中国の「天狗」の概念が仏教界に持ち込まれた。卷十九「畜生品」で、阿修羅と天の戦いについて描写したくだりに、「大夜叉等。聞天所説。歡喜踊躍。於彼惡龍阿修羅所。生大瞋恚。即下欲詣法行龍王。婆修吉徳叉迦等諸龍王所。説上因縁。從空而下。一切身分。光焰騰赫。見是相者。

²⁷ 『正法念処経 大正新修大藏経 No. 0721』 卷第十八、大藏出版株式会社、108 頁。

²⁸ 『正法念処経 大正新修大藏経 No. 0721』 卷第十八、大藏出版株式会社、106 頁。

皆言憂流迦下。魏言天狗下²⁹」とあり、「魏言天狗下」の注釈では、インドの「憂流迦」とは、魏のいう天狗だ、と説明されている。

この「憂流迦」とは何かについては、二つの解釈が見られる。夜叉と竜王である。前後の文脈から分析すると、天から降りてきたのは夜叉のはずである。唐の時代の鏡水寺の僧栖复（生没年不詳）が編纂した『法華経玄賛要集』でも、夜叉のことを憂流迦と解釈し、魏における天狗だと説明している。

この書は後に日本にも伝わった。『法華経玄賛要集』の第一巻には、「此書從巨唐來，在智證大師經藏，深秘不出，只聞其名。今興福寺釈真喜仲算，與彼門徒智興闍梨有刎頸交，相囑借請，始以書寫。後賢鑒。于時天祿元年，歲次庚午也。弘長元年（辛酉）七月二十三日，法隆寺僧聖讚全本寫留之，施入于專寺大經藏。以無類本，恐失墜，更書寫之訖。法隆學問寺正應³⁰」と記されており、天祿元年（970）以前にこの經典がすでに日本に伝わっていたと考えられる。この經典は、日本の天狗と夜叉の結合、または日本の天狗のイメージの形成に影響を与えたのではないかと考えられる。

一方、唐の段成式（803-863）が著した『酉陽雜俎』には、「竜王身光曰優流迦、此言天狗³¹」（竜王は身から光を發し、それは優流迦、すなわち天狗である）と記されている。この一句しかなく、何の解釈も付いていない。なぜ、夜叉であるはずの「憂流迦」を、段は竜王と解釈したのであろうか。

ここで、次の二点に注目してもらいたい。つまり、羅睺阿修羅の「出大光明」「震吼如雷」「謂天獸下」という特徴と、世間で「或言當儉。或言凶禍。殃及王者。或言兵刀起於境内」と言われていた、という点である。これらは、中国の天狗と性質がかなり似ていることを示している。晋代の郭璞が『山海経校注』という注釈書に、「周書云：『天狗所止地尽傾，余光燭天为流星，长数十丈，其疾如風，其声如雷，其光如電。』吳楚七国反时吠过梁国者是也³²」と書いている。ここから分かるように、中国の天狗は雷のような音を出し、稲妻のような光を見せるのが特徴である。また、兵乱の象徴でもある。

おそらく段は、竜王、すなわち羅睺阿修羅の性質を分析して、夜叉より竜王のほうが中国の天狗と似ていると判断し、敢えてそのような解釈を加えたのではなかろうか。『正法念処経』のこの部分に関する理解の違いから、中日の天狗のイメージの差異が生じたと言える。

『正法念処経』にはもう一カ所、興味深い記述がある。それは巻七〇で、星宿も善業か悪業に応じて果報が生じることを説明したくだりである。太陽や月が星に障られるのは、悪業があるからだと説明している。

²⁹ 『正法念処経 大正新修大蔵経 No. 0721』巻第十九、大蔵出版株式会社、111頁。

³⁰ 栖复『法華経玄賛要集 卅新纂續藏経 第34冊 No. 638』、197頁。

³¹ （唐）段成式『正積酉陽雜俎』掃葉山房、1931年、38頁。

³² （清）郝懿行『山海経笺疏』巴蜀書社、1985年、26頁。

日月若勝何故日月爲餘曜所覆。所謂日莎婆奴月羅睺。一切星宿爲曜所覆。曜爲餘覆。以是善不善故。宿曜亦有善不善業。³³

ここでいう「日莎婆奴月羅睺」は、四ヴェーダの天狗を想起させる。四ヴェーダでは、太陽を天狗とし、天狗の母親の名はサラマーである。「莎婆奴」は、太陽という天狗の名前ではないかと思われる。四ヴェーダではまた、月も天狗とされた。もう一匹の天狗は、羅睺ではないかと考えられる。

前述したように、古代のインドでは、太陽と月を二匹の天狗としていた。それは四ヴェーダに現れている。四ヴェーダは早くから中国に伝わっており、特にインド系の学僧には四ヴェーダに精通する人が少なくなかった。法雲の編纂した『翻譯名義集』に、「鳩摩羅什婆。此云童壽。祖印度人。……又習五明四韋陀典。……求那跋陀羅。此云功德賢。中印度人。幼學五明四韋陀論³⁴」とあるように、鳩摩羅什や求那跋陀羅などの学僧はヴェーダに非常に詳しく、それゆえ、学僧は、ヴェーダでいう太陽と月が天狗であることを知っていたのかもしれない。

それゆえ、『正法念処經』では、太陽である天狗を「莎婆奴」とし、月である天狗を「羅睺」としたのではなかろうか。羅睺はインドの天狗であり、日食・月食を起こすアスラであり、また、憂流迦すなわち竜王、魏のいう天狗である。ここでようやく、中国において、天狗と日食・月食が結びつくようになったのである。

『百喻經』では、犬はさらに日食・月食現象と関係付けられるようになった。しかし、天狗食日（月）は、それほど簡単には中国従来の儒教の考えを変えることができなかった。明に至るまで、日（月）食神話には蟾蜍ひきがえるや烏が登場するものが圧倒的に多かった。明に入ってから、やっと天狗食日（月）が現れ、それを基に中国古代からの太鼓や銅鑼を敲いて天狗を驚かす習慣が加わり、現代の天狗食日（月）信仰となったのではないかと考えられる。

さて、天狗食日（月）の由来について、もう一つ考えられるのは占星術の伝来である。

羅睺阿修羅は、後にインドの占星術に入って、蝕神となった。また、羅睺と対である計都も現れ、蝕神の尾とされた。この計都は、インド神話によると、ラーフの切り落とされた体の一部だという説がある。

占星術においては、日食・月食現象はこの二つの星神によってもたらされたといわれる。漢訳された際、計都は「彗星」とも訳された。周知のように、古代の天狗は彗星を指していた。

『史記』には、「天狗、状如大奔星，集解孟康曰『星有尾，旁有短彗，下有如狗形者，亦太白之精』³⁵」とあり、天狗は、彗星または「太白之精」を指すと記されている。

³³ 『正法念処經 大正新修大藏經 No. 0721』 卷第七〇、大藏出版株式会社、417 頁。

³⁴ 『大正新修大藏經 No. 2131』 大藏出版株式会社、1069-1070 頁。

³⁵ (漢) 司馬遷著・(南宋) 裴駰集解『史記』 卷二十七・天官書五、中州古籍出版社、1991 年。

天狗は、ラーフの切り落とした尾である計都とも接点があった。

このように、インドの古代信仰が仏教経典の漢訳とともに中国に伝わり、様々な解釈の下で、中国の天狗のイメージを変えただけでなく、中国古来の日食・月食神話も変え、天狗は蟾蜍や烏の代わりに食日（月）するものとなったのである。

現代では、インドの少数民族地方に、天狗食日信仰があるようである。また、中国の少数民族地方に流布している天狗食日（月）神話はインドの神話と同じく、不老不死の薬と関わりがある。それはインドの乳海攪拌の話に影響を受けたのではないかと考えられる。

天狗食日（月）信仰は、韓国にも伝わったようである。しかし、現代の日本には、類似する話はないようである。これは、神話の伝播ルートから考えると、面白いことである。今後は、日本も視野に入れて、インド・中国・韓国・日本の四国の日食・月食神話を比較してみたいと考えている。

さらに、もう一つの課題が残されている。つまり、なぜ明の時代に入って初めて天狗食月の話が出てきたのかということである。それはおそらく、元代の文化と関係があるように思われる。元の時代はモンゴル族という外来民族によって中国を統治されていた。モンゴル族は、儒教よりチベット仏教を重要視していた。よって、仏教の中の天狗のイメージが広がるようになったのではないかと推測できる。それについての分析は今後の研究に譲りたい。